

2016年3月19日(土) 13:00-15:00

日本安全保障貿易学会 第21回研究大会 (於:同志社大学)

第1セッション「イラン制裁緩和後の輸出管理」



# 制裁緩和後の中東地域秩序

—サウジアラビアとイランの対立の展望—

公益財団法人 中東調査会

研究員 村上拓哉

[takuya.murakami.19@meij.or.jp](mailto:takuya.murakami.19@meij.or.jp)

国交断絶に至るなど、緊張が高まるサウジ・イラン関係  
⇒ 中東地域秩序の帰趨を決する要因に  
「新中東冷戦」[Gause 2014]

Q. 現在のサウジアラビア(+湾岸諸国)とイランの紛争  
はどのような性質のものなのか

⇒ 二国間の対立関係の特徴を明らかにする  
ことで、今後の二国間関係の展望につい  
て論点を整理する



<本報告における主要な問い>

- ・サウジアラビアとイランの対立は**権力闘争**か、あるいは**宗派対立**なのか。
- ・サウジアラビアとイランの間で**直接的な軍事衝突**に至る蓋然性は高まっているのか。
- ・サウジアラビアとイランによる「**代理戦争**」は今後、激化・拡散していくのか。



## ・紛争論によるサウジ・イラン間の対立の構造

紛争 (Conflict) = 場 (主体・争点・手段) [加藤 1993]

**主体**: 政府間 or 社会間 or 政府・社会間

**争点**: 権力闘争 or イデオロギー (宗派) 対立

**手段**: 軍事 or 外交 or 経済 or イデオロギー

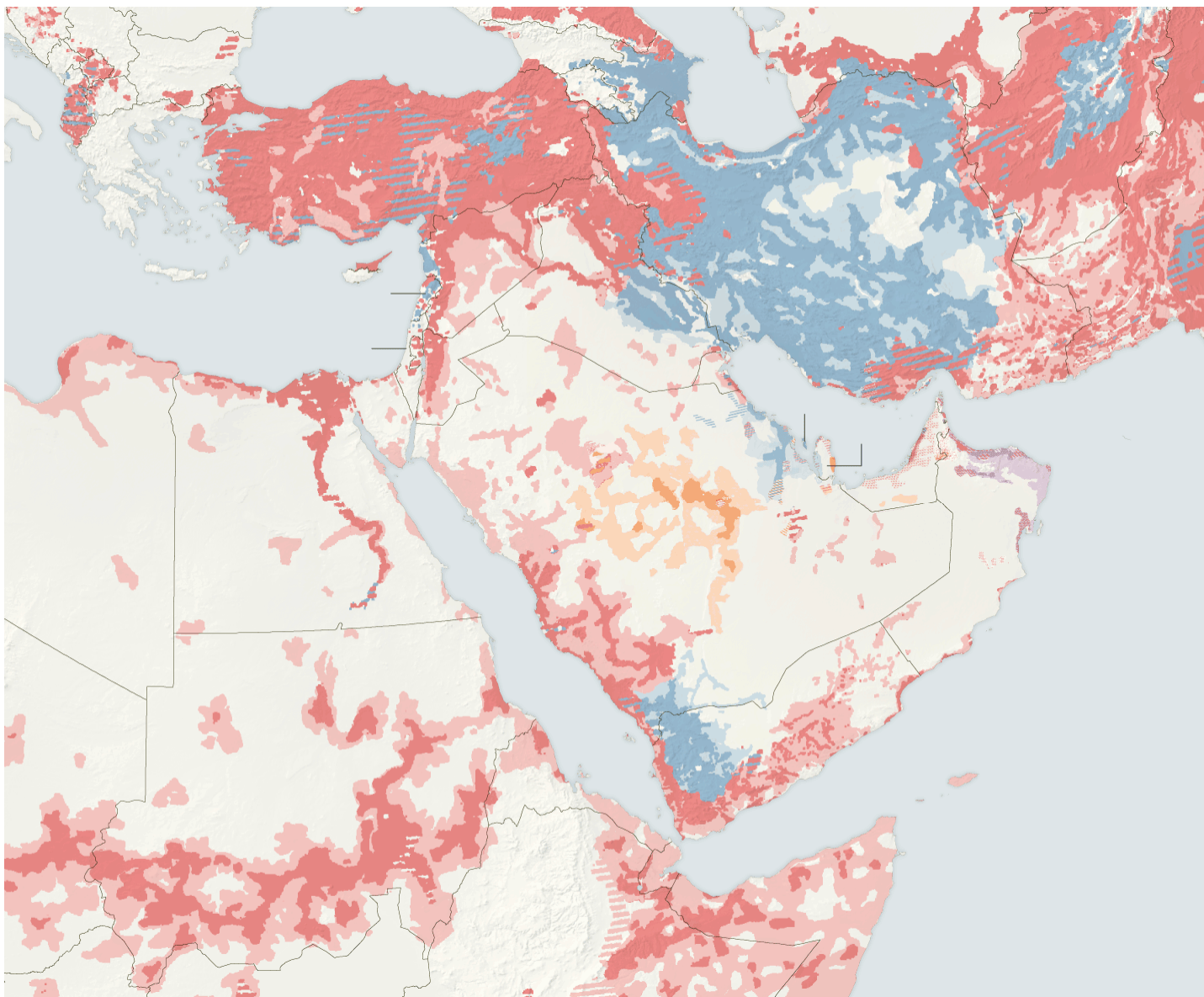
**場**: 二国間 or 周辺地域 (シリア、レバノン、イエメン etc.)

⇒ 本報告では、核合意後のサウジ政府・イラン政府間の軍事的・外交的対立に注目する。また、同対立を地域覇権を巡る権力闘争の要素が強い紛争と見なし、主要な紛争の場は周辺地域にあるものとする。[村上 2015a]

## ・対立におけるイデオロギーとレトリック

- ・対立の分断線が主にスンナ派/シーア派の勢力間で存在することは事実(サウジ、イランが自国に親和的な勢力への浸透を図った**結果**)
- ・他方、両国政府とも、自国の正当性を主張するために「スンナ派性」「シーア派性」を強調したことはほとんどない。**「宗派主義」という用語は相手を非難する際に用いられる。**(代わりに「アラブ」や「イスラーム」が正当性の拠り所として使用される)  
⇒宗派を強調することは、自国に同調する勢力を増やす上で非合理的な上に、自国内の少数派排除につながりかねない危険がある
- ・**社会レベルでの宗派間憎悪の高まり**による敵/味方の峻別はある  
Ex. サウジ東部州での過激派によるシーア派を標的にしたテロ、イラクでのシーア派民兵によるスンナ派住民への暴行など

# 図1. 中東地域におけるイスラーム教徒の宗派分布図



出所: The New York Times; M. Izady, Columbia University's Gulf 2000 project

## ・湾岸地域秩序の変容

### 1. 地域のパワー・バランスを担う主体としてのイラクの消滅

2003年のイラク戦争後、**イラクは「主体」ではなく「場」に**

⇒親イラン的なシーア派政権がイラクで誕生、サウジが反発

### 2. 米国の中東への関与の低下

オバマ政権によるアジアへの「リバランス」、イランとの核合意

⇒**紛争の主体としての米国の存在が希薄化**、代わりにサウジがイランと直接対峙

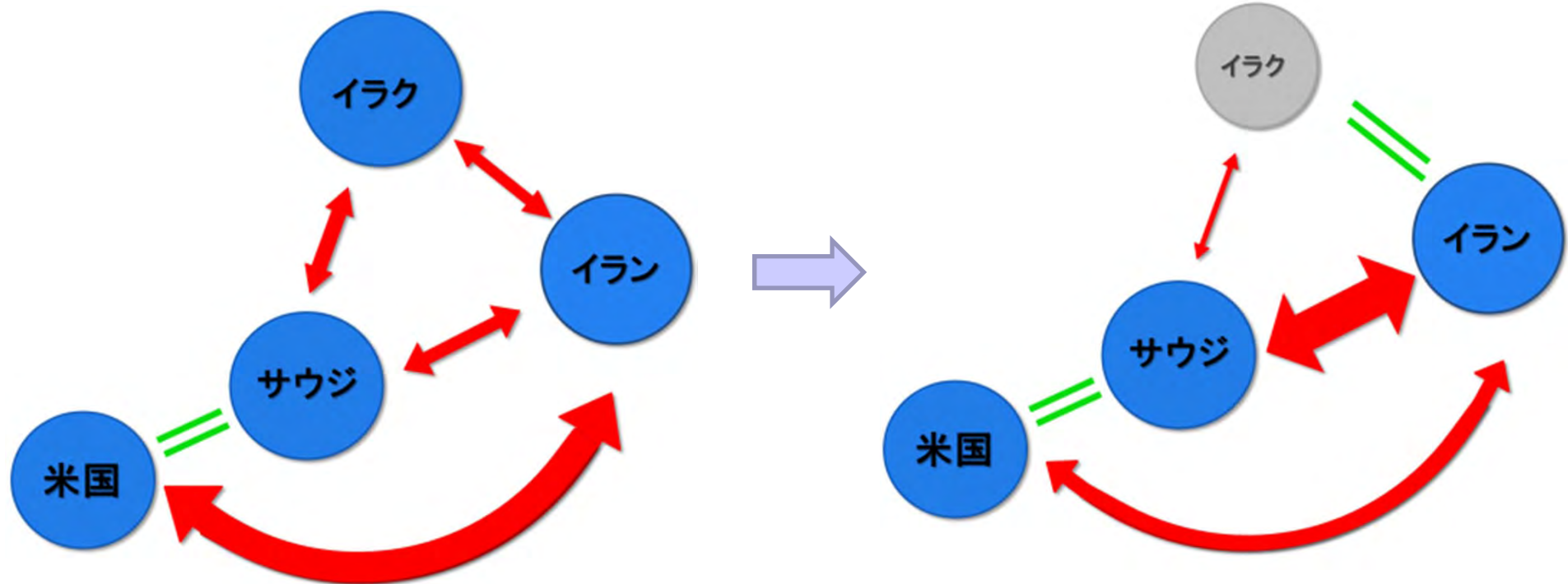
### 3. **周辺国(シリア、イエメン)での混乱の発生**

⇒サウジ・イランが各国に機会主義的に浸透することを可能にし、「代理戦争」が激化(手段の軍事化)

## 図2. 湾岸地域におけるパワーバランスの変化

2003年イラク戦争以前

2016年現在





# ・対イラン制裁緩和と地域のパワー・バランスの変化

・制裁緩和によるイランの経済状況の改善が発生しても、直近の**二国間のパワーバランスに大きな変化は出ない**。

表1: サウジ・イランの軍事費(1989-2012) (単位: 100万ドル)

	1989	1999	2009	2010	2011	2012
イラン	4913	6060	15535	15801	14278	11453
サウジアラビア	19743	24997	46004	47879	48531	54913

出所: SIPRI Military Expenditure Database

・サウジ側は**米国を「巻き込む」**ことが戦略的に重要な目標。2015年5月のキャンプ・デービッドにおける米・GCC首脳会談によって**外敵からの侵略に米国が対応することは確認済み**。

“The United States policy to use all elements of power to secure our core interests in the Gulf region, and to deter and confront external aggression against our allies and partners, as we did in the Gulf War, is unequivocal.”

(U.S.- Gulf Cooperation Council Camp David Joint Statement, May 14, 2015)

# ・制裁解除以降の軍事・経済動向

## <イラン制裁解除と経済関係動向>

- ・1月16日 核合意の履行日(Implementation Day) ⇒ **制裁解除**
- ・要人往来: 習近平国家主席の来訪(1月23日)、ロウハーニー大統領のイタリア、フランス訪問(1月25-28日)
- ・2月16日 サウジ、カタル、ロシア、ベネズエラが**増産凍結**で合意

## <軍事>

- ・2月14日 サウジ北部で20カ国による**合同軍事演習「北の雷」**が開始
- ・2月17日 ロシアがイランに**Su-30SM**を年内に**売却予定**と報道
- ・2月18日 ロシアがイランに**S-300**の配備を開始したと報道 ⇒ **否定**
- ・2月19日 サウジがレバノン国軍への**30億ドルの軍事支援を停止**
- ・2月25日 欧州議会が**サウジへの武器禁輸措置要請決議**を可決

# ・サウジとイランの国交断絶

## <時系列>

1月2日: サウジがシーア派の聖職者ニムル師を含む47人を処刑

⇒イランが反発、欧米諸国も懸念を表明

1月3日: 在イランのサウジ大使館・領事館が暴徒により襲撃される

⇒サウジがイランとの国交断絶を発表

1月4日以降、バハレーン、スーダンなどの周辺国がサウジに追随

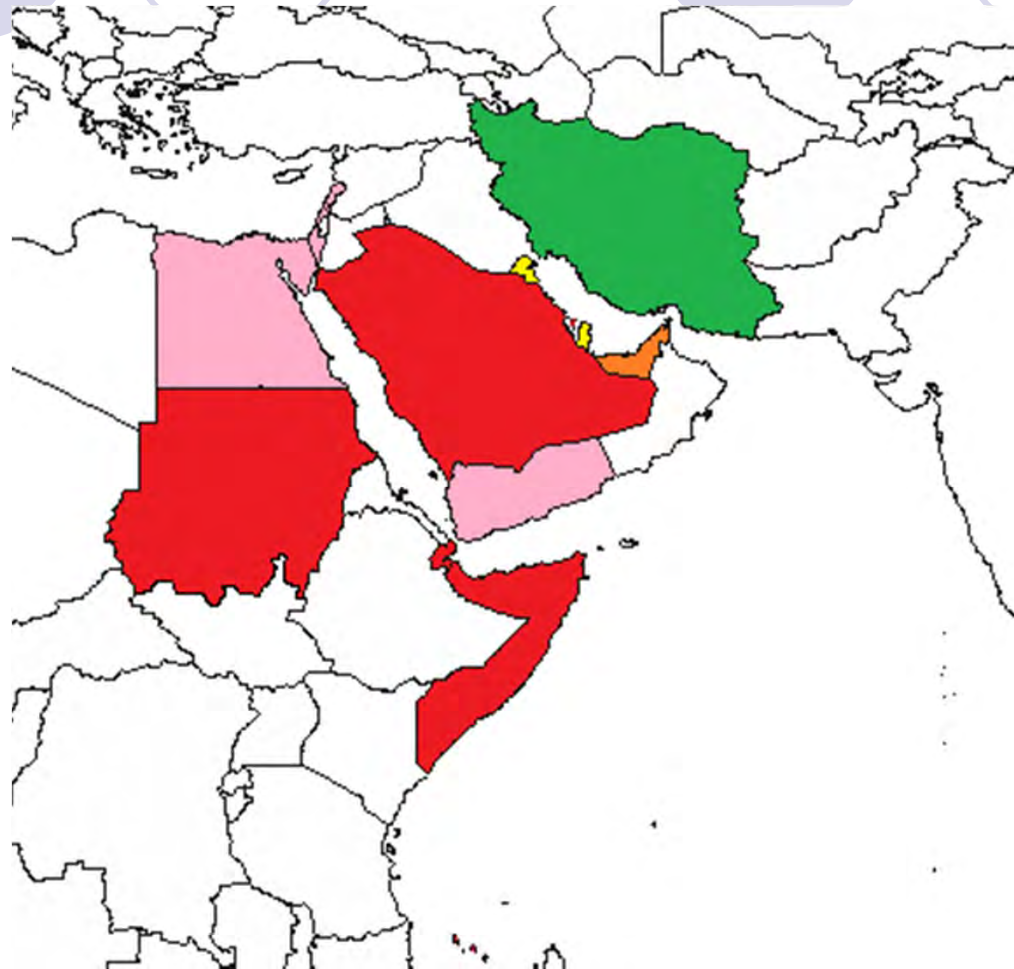
・2日の処刑は宗派主義を煽るもの？

⇒処刑者のうち**43人はスンナ派**. アル=カーイダ、「イスラーム国」からも非難声明が発出。

・両政府が原油価格のために対立をエスカレートさせている？

⇒大使館襲撃は**偶発的**. イラン政府は難しい立場に. サウジの同盟国の足並みにも乱れが.

### 図3. 周辺国とイランの外交関係(2016年1月20日現在)



注: 赤: 国交断絶 桃: 1月3日以前に国交断絶 橙: 外交関係格下げ 黄: 大使召還

## ・国交断絶後の外交紛争と関係悪化の常態化

ロシア、トルコ、イラク、パキスタンなどが**仲介**を提案 ⇒ **機能せず**

### ＜地域諸国の動向＞

(12月14日サウジが34カ国からなる「**対テロ軍事同盟**」の**形成**を発表)

・1月10日 アラブ連盟緊急外相会合(カイロ)

⇒イランでの大使館襲撃を非難する声明が採択 ※レバノンが棄権

・1月21日 イスラーム協力機構(OIC)緊急外相会合(ジッダ)

⇒イランでの大使館襲撃を非難する声明が採択 ※レバノンが棄権

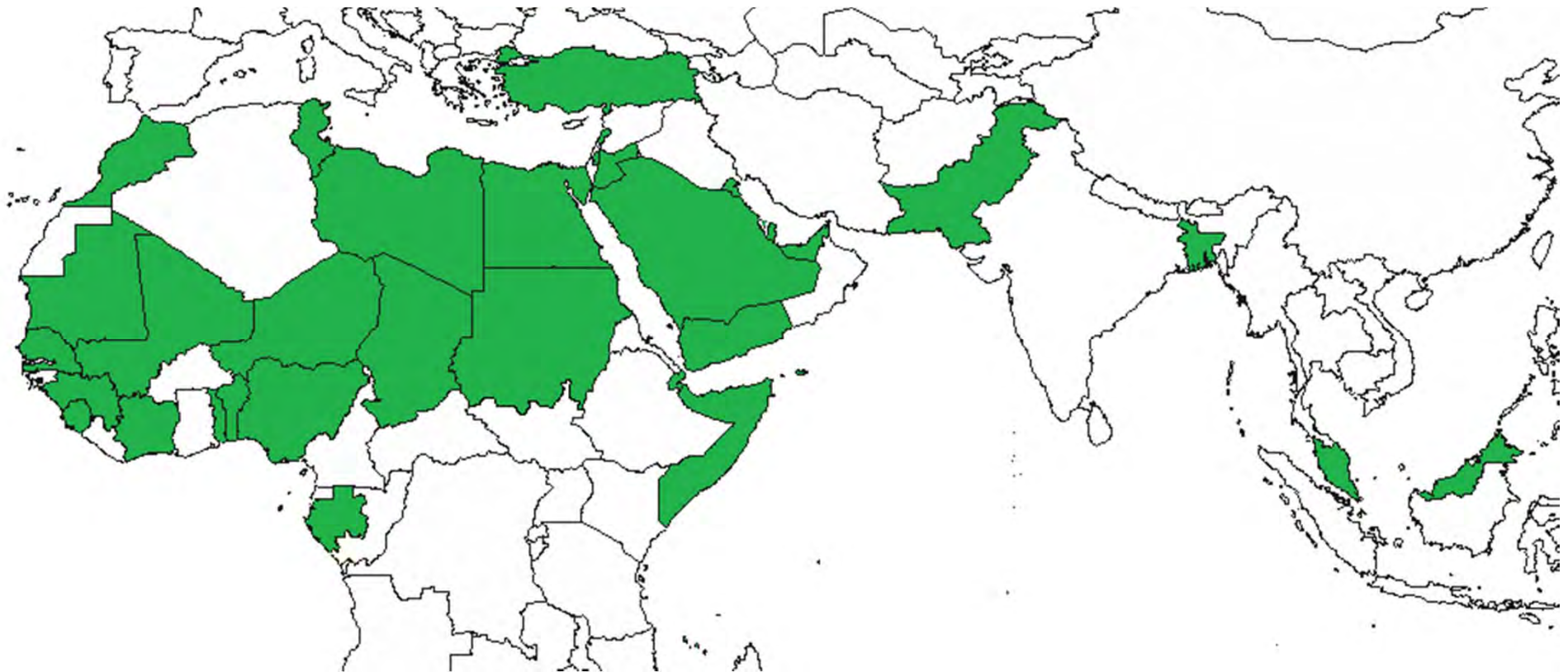
### ＜国交断絶状態の常態化＞

・1月21日 OIC会合にアラージェチー副外相が出席

・1月22日 世界経済フォーラムでザリーフ外相とトウルキー・ファイサル元総合情報庁長官が非公開会議で同席

・2月21日 トウルキー・ファイサル「**二国間での定期的な対話を支持**」<sup>13</sup>

## 図4. イスラーム諸国による対テロ軍事同盟参加国



出所: サウジ国営通信(2015年12月15日)の発表をもとに報告者作成

## ・二国間の対立の地域への波及(1)

### <シリア>

- ・2015年9月末のロシアによる空爆開始以降、サウジが支援する反体制派が劣勢に ⇒ サウジ側の敗色が濃厚

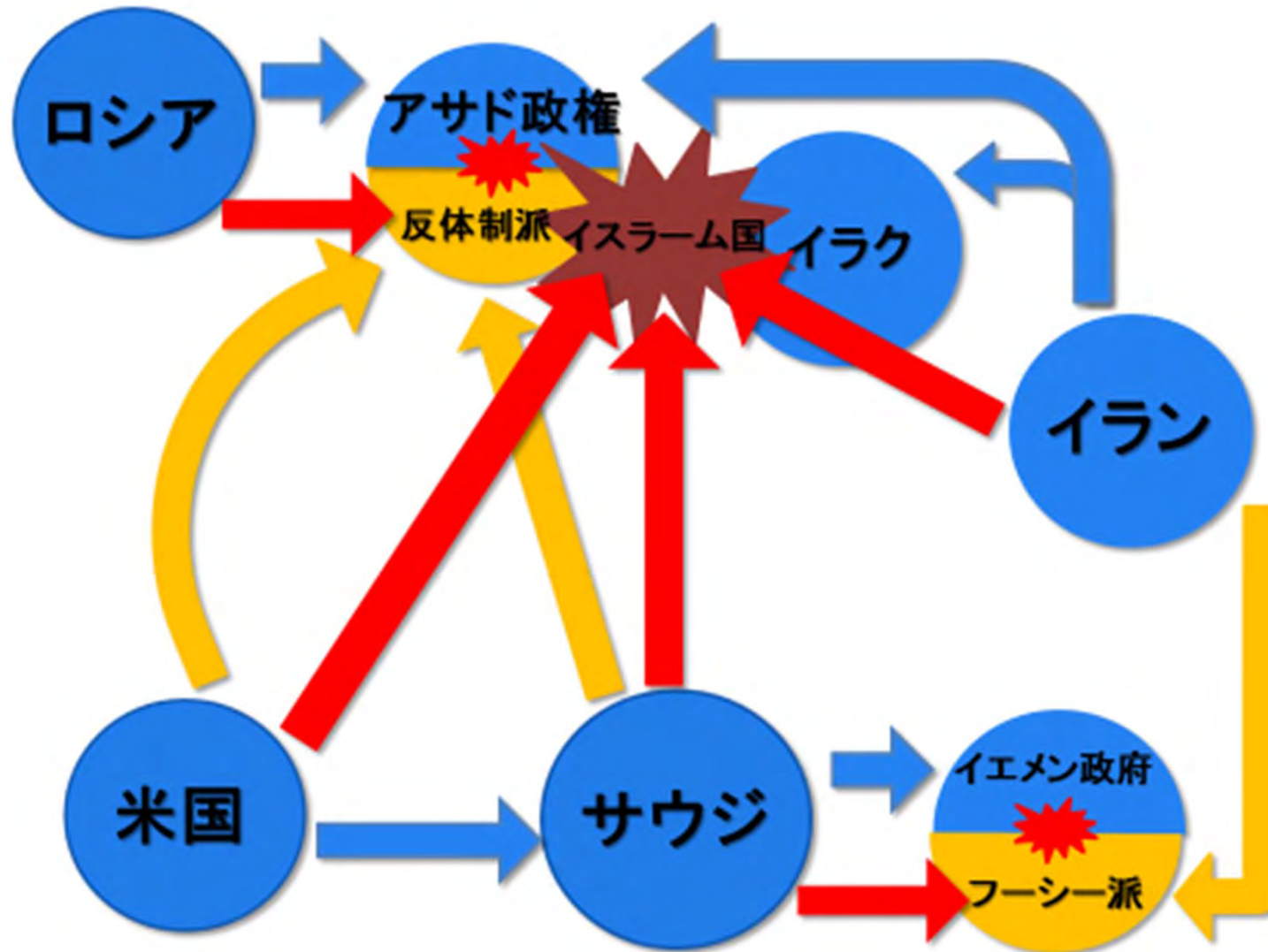
表2. 米国主導の連合軍、ロシアによるシリアへの爆撃回数

	爆撃回数	期間	月平均
米国主導の連合軍	3556回	2014.09.22-2016.03.01	約200回
ロシア	18000回(推計)	2015.09.30-2016.02.16	約4000回

出所: U.S. Department of Defense, Special Reports: Operation Inherent Resolve [Accessed 4 March 2016]; Ministry of Defence of the Russian Federation, Operation in Syria [Accessed 4 March 2016] をもとに報告者作成

- ・ロシア、トルコの直接的な介入が増すなか、シリア戦線におけるサウジ、イランの存在感は低下
- ・サウジによる地上軍派遣の可能性、反体制派への地対空ミサイル供与の検討、レバノンでの新たな戦線の形成？

図5. サウジ・イランによる「代理戦争」関係図(16年3月現在)



注: 赤: 軍事攻撃      青: 政府支援      黄: 反体制派支援



## ・二国間の対立の地域への波及(2)

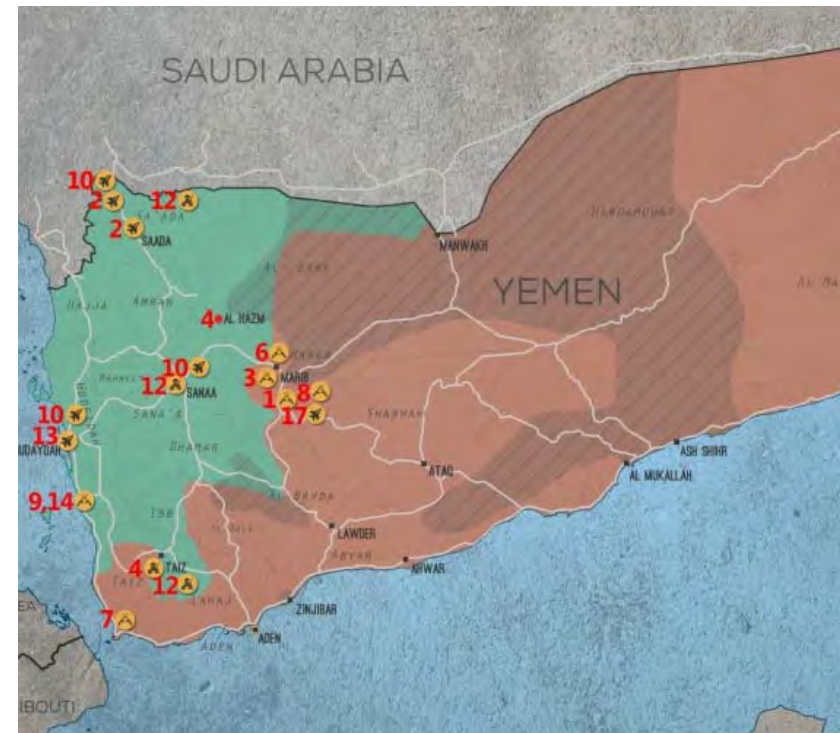
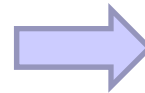
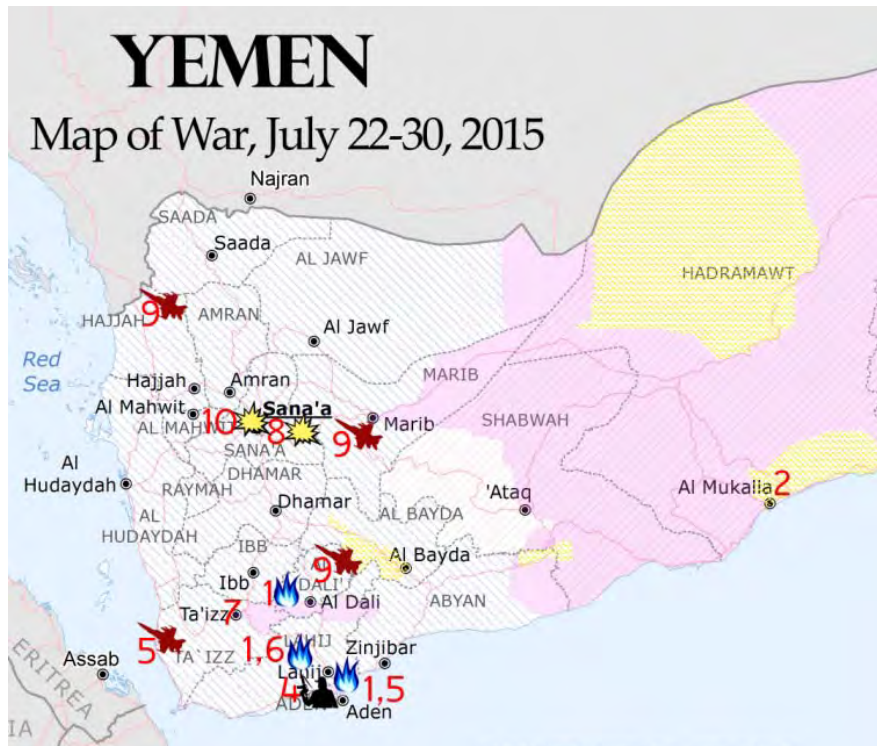
### <イエメン>

- ・サナア奪還に向けてサウジ主導の連合軍、イエメン政府軍(ハーディー政権側)が**着実に進軍**(マアリブの奪還、タイズへの攻勢)
- ・ハーディー大統領「タイズ、フダイダ制圧後にサナアを陥落させる」
- ・東部・南部で**アラビア半島のアル=カーイダの影響力が拡大**
- ・欧米諸国の支持を得てサウジは軍事介入に踏み切ったものの、紛争の長期化と一般市民への被害の拡大により、**欧米諸国からの停戦圧力が強まる**
- ・イランがフーシー派への支援を強化するようであれば、イエメン戦線は泥沼化する恐れも

## 図4. イエメン紛争の戦況

2015年7月22-30日時点

2015年12月24日時点



(出所: South Front, International Military Review - Yemen)

## ・まとめ

- ・主体としてのイラクの消滅、米国の中東地域への関与の低下、周辺国での混乱の発生により、サウジとイランの対立が激化した。二国間の対立の争点は宗派主義よりも権力闘争の色合いが強い。
- ・対イラン制裁緩和は、短・中期的な二国間のパワー・バランスには大きな影響を与えない。米国はサウジに対し「外敵」からの攻撃には対処することを保証しており、地域の安全保障秩序に変化なし。
- ・周辺地域における「代理戦争」は、シリアにおいてはサウジが、イエメンにおいてはイランが介入を強化するかどうか分岐点。他方、戦況は一方に傾きつつあり、第三国が介入する余地は狭まってきている。

## 主要参考文献

- Anthony H. Cordesman and Michael Peacock [2015] *The Arab-U.S. Strategic Partnership and the Changing Security Balance in the Gulf*. Center for Strategic and International Studies.
- Gregory Gause III [2010] *The International Relations of the Persian Gulf*. Cambridge University Press.
- Gregory Gause III [2014] *Beyond Sectarianism: The New Middle East Cold War*. The Brookings Institution.
- Kenneth Katzman [2015] *Iran, Gulf Security, and U.S. Policy*. CRS Report RL32048. Congressional Research Service.
- 加藤朗[1993]『現代戦争論』中公新書。
- 中村覚[2016]「サウディアラビア・イラン間の安全保障のジレンマ——全方位均衡論の応用から」『中東研究』第525号(1月)、39-51頁。
- 村上拓哉[2015a]「サウジアラビアとイランの「冷戦」——「権力闘争」か「宗派対立」か」『中東研究』第523号(5月)、42-52頁。
- 村上拓哉[2015b]「湾岸地域における新たな安全保障秩序の模索——GCC諸国の安全保障政策の軍事化と機能的協力の進展」『国際安全保障』第43巻第3号(12月)、43-57頁。
- 村上拓哉[2016]「サウジアラビアとイランはなぜ対立するのか」SYNODOS、1月13日。<<http://synodos.jp/international/15906>>